

幼児のソシオメトリー地位と自己の意図の客観視との関係

—面接法と自然観察法の比較調査—

吉村 斉^{1*} , 山本英作²

The Relations between Preschool Children's Sociometric Status and Their Objective Attribution to Their Own Intention: A Comparative Study of Sociometric Status between Interview Method and the Natural Observation Method

Hitoshi YOSHIMURA^{1*} and Eisaku YAMAMOTO²

Abstract: This study examines the relations between preschool children's sociometric status and their objective attribution to their own intention. Participants were 80 3-, 4-, and 5-year old kindergarteners. The intention was constructed by false belief, belief, desire, and intention. The researches were conducted by methods of interview and natural observation to estimate to scores, and the following significant results were obtained. Girls' belief scores were significantly higher than boys' scores in sociometric status M-group. Moreover, 5-year-old children's false belief scores were higher than 3- and 4-year-old children's scores in sociometric status M-group. In addition, 3-year-old children's scores were higher than 4-year-old children's scores in the M-group. However, the results of the sociometric status by the interview method were different from those by the natural observation method. The above results suggest that the children's playing conditions may have an influence on sociometric status or their attribution to their own intention.

Keywords: Objective attribution • Intention • Sociometric status • Kindergartener

問 題

幼児は、仲間とのかかわりの中で、さまざまな自己主張のぶつかり合いや葛藤、不安などを体験する。その際、自己の欲求や意思に基づいて、自発的に自己の行動を調節する能力を育てることは、従来の諸研究から指摘されてきた。

仲間とのかかわりを通して、自己調整能力を育てることで、自己の客観視につながる事が示唆される。しかし、仲間とかわる経験が乏しいと、自己の客観視を学習する機会を失うこととなる。それゆえ、幼児期の遊び場面において、遊び仲間を選択されやすい子どもと、排斥され

¹〒780-0955 高知市旭天神町292

高知学園短期大学 幼児保育学科 . E-mail: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292 Asahi Tenjin-cho, Kochi 780-0955, Japan

²〒780-0955 高知市旭天神町292

高知学園短期大学 幼児保育学科 . E-mail: eisaku@kochi-gc.ac.jp

Department of Early Childhood Education and Care, Kochi Gakuen College, 292 Asahi Tenjin-cho, Kochi 780-0955, Japan

やすい子どもの間には、自己統制に大きな違いがあるだろう。本研究では、幼児の被選択数(以下、ソシオメトリー)と自己の客観的帰属の関係、およびその発達について検討することとする。

まず、幼児の仲間関係の特徴について検討する。斉藤・木下・朝生(1986)によると、幼児期の仲間関係を通して発達する社会的コンピテンスの1つとして、他者理解・共感が挙げられる。すなわち、多くの仲間とかかわっている幼児は、かかわっていない幼児よりも、人の意図を正しく推測できることが示唆される。人の意図は、信念、願望から構成されることから(Wellman, 1990)、Wimmer & Parner(1983)は、誤信念を変数に用いて、心の理論の理解の発達について検討を試みた。その結果、4歳から7歳にかけて正解率が上昇したという。それゆえ、仲間との相互交渉が本格化することによって、心の理論の発達が促進されることが予測される。しかし、仲間関係の発達と心の理論の発達の間には不明な点が多い。この予測が明らかにされると、認知発達の個人差が大きい乳幼児期において、保育者がその差を考慮して子どもと接する上で、意義のある手掛かりが得られると期待される。そこで、本研究では、幼児のソシオメトリーの地位に応じて、各自の誤信念、信念、願望、意図の帰属が異なるか否か、さらにはその違いが年児や性別に応じて異なるか否かを明確にすることを目的とする。

では、幼児のソシオメトリーの特徴について検討する。Putallaz(1983)によれば、自己顕示欲の強い子どもの人気は低いことが示唆されている。青年期を対象にした坂西(1994)の研究においても、人に対する思いやりが薄く、自分の利益を優先し、自己主張が強く、周囲との調和をあまり考慮しない特徴(以下、「利己的」と略記)をもつ子どもは、自分自身を客観的に見つめて理解すること、周囲の状況や他者の行動を考慮して適切な対応をすること、さらには他者の心情を察して対応することなどが苦手であるという。吉村(2007)においても、利己的な特徴をもつ中学生は、友達や学校への満足感、

学業に対する士気が低いことが示唆されている。場合によっては、思春期の非行へとつながるリスクがある(Asher & Coie, 1990)。さらに、青年期後期では、この特徴をもつ女子において、専門職への就職意欲や学生生活への満足感の低下も示唆されている(吉村, 2004)。それゆえ、自己中心性が強いとされる幼児期において、仲間とのかかわりを経験しながら、自己を客観的に捉えることができるようになる体験は、ライフサイクルの視点からも重要な課題であるといえる。

そこで、ソシオメトリーと自己の客観視の関係について、詳しく検討を進める。Michelson, Sugai, Wood, & Kazdin(1983)によると、周りの人々から拒否されることは、後に仲間からの仕返しを受け、友を失い、人との接触も少なくなる。その結果、さらに仲間とかかわることができず、自己を統制して他者とかかわる機会そのものを失ってしまうことが推察される。とりわけ、幼児期にその機会を失うことは、自分自身を客観的に捉え、他者の立場に立つ体験そのものを失うこととなる。さらに、Asher & Coie(1990)より、ソシオメトリーと自己の客観視の関係には性差があることも指摘されている。とりわけ、女兒よりも男児が、状況において有能な行動をとることが困難であるという。その原因として、男児は、女兒に比べると、敵意のある意図を仲間の挑発者に帰属しやすいことが挙げられている。また、幼児期にもっとも多いいざこざの状況は、物や場所の占有を原因とするものであった(斉藤・木下・朝生, 1986)。それゆえ、遊具の取り合いに発展しそうな場面では、女兒が的確な判断をしやすいことが示唆される。したがって、幼児において、自己の誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属できるのは、ソシオメトリー地位が高い子どもについては女兒の方であろう。逆に、低い子どもについては、自己を統制して他者とかかわる機会に乏しいことから、男女間に差は見られないことが予想される。

ところで、発達の変化に注目すると、子どもの情報処理のパターンは、年少児より年長児の

方が洗練されている（Asher & Coie, 1990）。それゆえ、幼児的的確な判断は、年児が高くなるにつれて可能になるのは当然である。ソシオメトリー地位が高い子どもについては、年児が高くなるにつれて、誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属できるようになるだろう。他方、低い子どもについては、自己を客観的に捉える体験が乏しいことから、年児の違いは見られないことが予想される。

なお、1つの研究方法だけが万能であることはありえない（山田, 1992）。他の方法による結果と比較し、その違いの吟味を蓄積することで、理論化が可能となるものである。本研究では、試みに幼児のソシオメトリーの測定を面接法と自然観察法の2種類によって測定し、両者を比較する。

以上のことから、本研究では、次の結果を予想して吟味することとする。

仮説1：ソシオメトリー地位が高い場合、男児に比べると、女児が自己の誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属している。一方、低い場合、性差はない。

仮説2：ソシオメトリー地位が高い場合、3歳児や4歳児に比べると、5歳児が自己の誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属している。一方、低い場合、年児間に差はない。

方 法

調査対象者 幼稚園3歳児クラス27名（男児13名、女児14名）、4歳児クラス31名（男児16名、女児15名）、5歳児クラス32名（男児13名、女児19名）合計90名であった。ただし、回答の不備や理解不足と思われる者は、分析の対象から外したことから、最終的には計80名（3歳児26名、4歳児28名、5歳児26名）を分析の対象とした。

手 続

1. ソシオメトリーの測定

(1) 面接法による測定 調査対象者のクラス内における人気の程度を測定するため、Takahashi (1990) の対人枠組みの手続きを参考に、以下の3つの場面を設定した。個別に面

接を行い、その様子を示した絵を提示しながら、誰と一緒に活動したいかを質問した。回答は、先行研究を参考に、3人まで求めることとした。

①動物園の場面 動物園に行きました。馬さんに乗れます。(面接者の)○ちゃんが乗っているね。()組さんの中なら、誰と一緒に乗りたいかな？

②砂場の場面 砂場にトンネルを作ろうと思い、まず山を作りました。そしてトンネルを掘るのですが、向こう側まで掘るのは大変です。そこで反対側から友達に掘ってもらうことにしました。()組さんの中なら、誰と一緒にトンネルを掘りたいですか？

③乗り物ごっこの場面 乗り物ごっこをしています。この車には1人だけお友達が乗ることができます。(面接者の)○君は、()組さんの中なら、誰と一緒に乗りたいですか？

(2) 観察法による測定 登園後の自由時間において、一緒に遊び始めた3名までを記録した。

2. 意図の理解の測定 調査対象者が、客観的な立場になって、意図を理解できているか否かを測定するため、子安(1997)の信念-願望シエマに関する課題を参考に、以下の場面を設定した。Aには対象者自身、Bには1人で3名までに選択されなかった子どもの名前を入れた。

(1) クレヨンの場面

・Aはクレヨンを大きい箱にしまって部屋を出ました。

・その後、Bが部屋に入ってきて、大きい箱からクレヨンを出して1人で絵を描いて遊びました。

・しばらく絵を描いた後、Bはクレヨンを大きい箱ではなく小さい箱にしまって部屋を出ました。

・その後、またAが部屋に入ってきました。クレヨンで絵を描こうと思ったからです。

(2) 積木の場面

・Aは積み木を小さい箱にしまって部屋を出ました。

・その後、Bが、部屋に入ってきて、小さい箱から積み木を出して、1人で遊びました。

・しばらく、積み木で遊んだ後、Bは積み木

を小さい箱ではなく大きい箱にしまって部屋を出ました。

・その後、またAが部屋に入ってきました。積み木で遊ぼうとしたからです。

(3) ボールの場面

・Aはボールを白い箱にしまって、部屋をでました。

・その後、Bが部屋に来てボールを出して1人で遊びました。

・しばらく遊んだ後、Bはボールを黒い箱にしました。そして、部屋を出て行きました。

・その後、またAが部屋に入ってきました。ボールで遊びたいからです。さて、Aはボールを白と黒のどちらの箱に取りに行くのでしょうか。

(1)–(3)について、各場面の様子を示した図を提示しながら、場面単位で以下の質問を行った。

①誤信念の質問 Aはどちらの箱に取りに行くかを尋ね、子安(1997)に基づいて、正解なら2点、誤りなら1点と得点化を行った。

②信念の質問 BはAがボールを使っていたことを知っていたのか否かを尋ねた。この場合、Bが入室したときにAはいなかったことから「知らなかった」と回答した場合を正解として2点、「知っていた」と回答した場合を1点とした。

③願望の質問 BはAを困らせたいと思っ、別の箱に移したのか否かを質問した。ここでは、「困らせたいと思った」と回答した場合1点、「困らせるつもりはなかった」と回答した場合を2点とした。

④意図の測定 Bはどれくらい意地悪でしたと帰属したかを質問した。回答は、意地悪の程度を4件法で示した図(吉村,2003)を提示し、その番号を選択させた。すなわち、点数が高いほど、「意地悪」と帰属したこととなる。

調査の実施 2007年11月下旬に、幼稚園内の教室やホールを使用して個別面談による調査を実施した。なお、自然観察については、面接による調査と同日の朝、登園してからの自由遊びの時間帯(約1時間)に、園庭および教室で実

施した。ただし、観察では、当日の園の事情や天候を配慮して、4歳児と5歳児のみを対象とした。

結果

面接によるソシオメトリーのグループ化 面接法によるソシオメトリーをグループ化するために、各クラスの3位までの被選択数の平均値を基準に、 $M \pm \frac{1}{2} SD$ に応じてH群($N=26$)、M群($N=24$)、L群($N=25$)に分類した。各クラスの平均値は、5歳児が $M=5.81$ ($SD=3.08$)、4歳児が $M=6.39$ ($SD=2.74$)、3歳児1クラスが $M=4.81$ ($SD=3.60$)、2クラスが $M=4.56$ ($SD=2.25$)であった。

自己の客観視におけるソシオメトリーと性別の関係 仮説1を検討するため、誤信念・信念・願望・意図の場面あたりの平均値を従属変数としてソシオメトリー(3)×性別(2)の二要因分散分析(多重比較は有意水準を $\alpha=.05$ としたTukeyのHSD法を用いた)を行った。

1. 誤信念 分散分析の結果、有意差は認められなかった。

2. 信念 分散分析の結果、ソシオメトリーと性別の交互作用が有意であった($F(2, 69)=3.52, p<.05, MSe=.22, Figure 1$)。単純主効果を検討すると、H群については男児($M=1.56$)と女児($M=1.58$)の間に差は見られなかったものの、M群については女児($M=1.67$)が男児($M=1.21$)より高かった($F(1, 69)=5.73$)。これに対して、H群とL群では有意な性差は見られなかった($F(1, 69)=.01; F(1, 69)=1.72$)。

3. 願望 分散分析の結果、有意差は認められなかった。

4. 意図 分散分析の結果、有意差は認められなかった。

自己の客観視におけるソシオメトリーと年児の関係 仮説2を検討するため、誤信念・信念・願望・意図を従属変数としたソシオメトリー(3)×年児(3)の二要因分散分析を行った。

1. 誤信念 分散分析の結果、ソシオメト

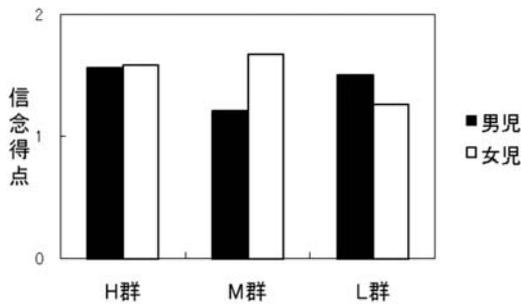


Figure 1 . 信念におけるソシオメトリーと性別の関係

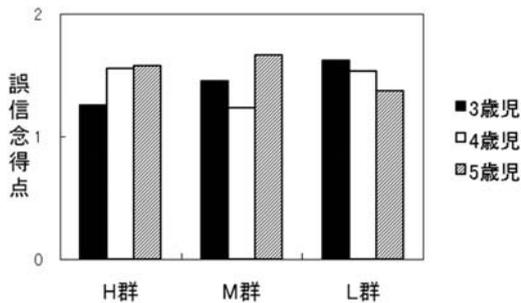


Figure 2 . 誤信念におけるソシオメトリーと年児の関係

リーと年児の交互作用が有意であった ($F(4, 66)=2.89, p < .05, MSe = .12, Figure 2$)。具体的には、H群については5歳児 ($M = 1.58$) と4歳児 ($M = 1.56$) が3歳児 ($M = 1.26$) より高かった。単純主効果を検討すると、M群において5歳児 ($M = 1.67$) が3歳児 ($M = 1.46$) と4歳児 ($M = 1.24$) より、3歳児が4歳児より高い傾向が見られた ($F(2, 66) = 2.68$)。これに対して、H群とL群では、年児の有意差は見られなかった ($F(2, 66) = 2.31; F(2, 66) = 1.14$)。

2. 信念 分散分析の結果、年児の主効果が有意であった ($F(2, 66)=8.83, p < .001, MSe = .19$)。多重比較を行うと、5歳児 ($M = 1.71$) と4歳児 ($M = 1.52$) が3歳児 ($M = 1.19$) より高かった。

3. 願望 分散分析の結果、年児の主効果が有意であった ($F(2, 66) = 4.69, p < .05$

Table 1 . 面接法と観察法による被選択数の違い

面接法	自然観察法			計
	H群	M群	L群	
H群	5	2	10	17
M群	3	6	10	19
L群	3	6	13	22
計	11	14	33	58

※ 4歳児と5歳児対象

$MSe = .28$)。多重比較の結果、5歳児 ($M = 1.61$) が3歳児 ($M = 1.16$) より高かった。

4. 意図 分散分析の結果、年児の主効果が有意な傾向にあった ($F(2, 66) = 2.99, p < .10, MSe = .79$)。具体的には、3歳児が ($M = 2.09$) 5歳児 ($M = 1.51$) より高い傾向にあった。

面接法と観察によるソシオメトリーの違い本研究では、参考程度に、4-5歳児の自由遊び場面の自然観察法によるソシオメトリーの測定も行った。面接法と同じ基準で3群化を行い、その結果と面接法による3群化の結果の関連を χ^2 検定で検討すると、有意差は認められなかった ($\chi^2(4) = 3.10, n.s., Table 1$)。

考察

本研究では、幼児を対象に、クラス内のソシオメトリーと自己の意図の客観視の関係を検討した。以下では、得られた結果に基づいて、仮説の検証に絞って考察を行う。

まず、本研究の第1の目的は、ソシオメトリー地位が高い場合、男児に比べると、女児が自己の誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属しているが、低い場合は性差がないか否かを明らかにすることであった。このことは、ソシオメトリーと性別の交互作用を検討することで考察できる。本研究では、信念において交互作用が認められた。しかし、ソシオメトリーが高い群も低い群も性差は見られず、有意であったのはその中位に属する子どもたちであった。すなわち、M群では女児が男児より信念を正しく帰属していることが示唆された。

Kagan(1969)によると、男児では攻撃行動

が奨励されることに対して、女兒では抑制が求められる。また、Miller, Danahar, & Forbes (1980)によれば、いざこざの解決において、女兒は妥協や説明での解決を図ることに対して、男児は身体的攻撃など一方的な方略をもっとも用いる傾向があるという。つまり、遊びの場面において、男児は他者の立場に立つよりも自己を優先する経験が多く、女兒は相互理解を目指すようにかかわる経験が多いことが示唆される。それゆえ、この群では女兒が正しく帰属できていたことが推察される。

しかし、H群やL群で性差が見られないことから、ソシオメトリーと自己の客観視の発達は不明なままである。児童期も含めた追跡検討が今後の課題になるといえる。また、誤信念、願望、意図では性差が見られなかったことから、遊びでの経験が認知発達に影響する範囲は絞られていることも推察される。あるいは、交互作用効果は信念から見られ始め、後に他の要因に広がるとすれば、要因間の因果関係を明確にする実験的検討が望まれる。以上のことから、仮説1を支持する結果は得られなかったものの、本研究の課題を保育現場に反映させるためには、幼児期から児童期にかけての変化と要因間の因果関係の検討が課題であることが示唆された。

次に、本研究の第2の目的は、ソシオメトリー地位が高い場合、3歳児や4歳児に比べると、5歳児が自己の誤信念、信念、願望、意図を正しく帰属しているが、低い場合は年児間に差がないことを明らかにすることであった。このことも、ソシオメトリーと年児の交互作用を検討することで考察できる。本研究では、誤信念において交互作用が有意であった。しかし、ここでも、H群とL群では有意差が見られず、M群で4歳児がもっとも低い結果が得られたのみであった。したがって、仮説2も支持を得られたとはいえない。

年児が高くなるにつれて、正しく帰属できるのは半ば当然である。しかし、本研究の結果は、その予想に反するものであった。Green (1933)によると、遊びのグループの人数は、3、4歳

位までは2名が多いが、4、5歳以上になると3-5名グループの比率が高くなる。本研究では、ソシオメトリーの対象を3名までとした。しかし、依田・大橋・島田(1954)によると、好きな友だちの選択数は、その集団への在籍期間も関係しているという。とりわけ、クラスの在籍期間が短い3歳児において、3名までが妥当であったか否かは不明である。場面についても、平素の遊びで実践しているものなのか、さらにはそれが可能な運動の発達を遂げているのかという要因が回答に影響を及ぼした可能性もある。遊びの状況とソシオメトリーの関連について追跡することが、今後の課題である。

また、実際に友だちと一緒に遊ぶことができるようになるのは3、4歳以降であるという(Parten, 1932)。つまり、年齢が上がるにつれて協調性を必要とする連合遊びや協調遊びが中心になってくる。平素の遊びの発達差が、本研究の結果に影響を及ぼしたとすれば、3歳児から5歳児までに対して共通の課題で測定することに限界があることも否めない。条件の統制を図った上で、実験的検討を行うことも課題である。

あるいは、斉藤・木下・朝生(1986)より、3歳児の勢力関係では、自己中心的で自己主張の強い子どもが勢力者となり、周りの子どもがそれに従う傾向がある。それゆえ、人気のある子どもの方の自己中心性が強いことも示唆される。勢力関係については、年齢が高くなるにつれて、支配-服従関係や圧力の正統性への素朴な疑問が生じ始め、後にこの勢力者である子どもは人気を得られなくなっていくことから、ソシオメトリーと自己の客観視の関係は、3、4歳児ではまだ確立されておらず、5歳児までのレディネス期間であることが考えられる。本研究の結果と平素の仲間関係の観察との関連を明確にすることも不可欠となる。

これに関連して、本研究では、面接法と自然観察法によるソシオメトリーの違いについても検討された。その結果、両者に整合性が見られず、方法による結果の違いも示唆された。仲間関係は流動的であることから、1つの結果で結

論を導くことはできない。他の研究方法による結果との整合性も確認しながら、追究することも今後の課題である。

このように、本研究では未解決の問題が残されている。それでも、従来の研究ではあまり注目されてこなかったソシオメトリーのM群で性差や発達差が認められたことは、多様な特性をもつ子どもたちに目を向け、指導方法を考える上で意義があるものと思われる。さらに、状況を考慮する必要性が示唆されたことは、仲間関係の発達に関する研究の発展において、新たな視点を提供するものと思われる。

謝辞：本研究は、平成19年度日本私立学校振興・共済事業団「学部教育の高度化・個性化支援メニュー群」教育・学習方法等改善支援経費（教育・学習方法の改善）の助成を受けて実施されました。調査の準備・実施にあたっては、平成19年度高知学園短期大学幼児保育学科2年生70名の協力を得ました。深く感謝いたします。最後に、調査にご協力下さった幼稚園の先生方、園児の皆さんに改めて謝意を表します。

引用文献

Asher, S. T., & Coie, J. D., *Peer rejection in childhood*, 1990, New York: Cambridge University Press. (山崎 晃・中澤 潤 (監訳), *子どもと仲間の心理学：友だちを拒否するところ*, 1996, 京都：北大路書房, 122-157.)

坂西友秀, 教師の利己的生徒, 利他的生徒についての認知と生徒の自己認知 *教育心理学研究*, 1994, 42, 403-414.

Green, E. H., Friendship and quarrels among preschool children, *Child Development*, 1933, 4, 237-252.

Kagan, J., *Personality development*, 1969, New York: Harcourt Brace Jovanovich. (三宅和夫 (監訳), *子どもの人格発達*, 1979, 東京：川島書店, 85-105.)

子安増生, 子どもが心を理解するとき, 1997, 東京：金子書房, 106-109.

Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., &

Kazdin, A. E., *Social skills assessment and training with children*, 1983, New York: Plenum Publishing. (高山 巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一 (訳), *HAND BOOK こどもの対人行動：社会的スキル訓練の実際*, 1987, 東京：岩崎学術出版社, 1-18.)

Miller, P. M., Danahar, D. L., & Forbes, D., Sex-related strategies for coping with interpersonal conflicts in children aged five and seven. *Developmental Psychology*, 1987, 22, 543-548.

Parten, B. M., Social participation among preschool children, *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1932, 27, 243-269.

Putallaz, M., Predicting children's sociometric status from their behavior. *Child Development*, 1983, 54, 1417-1426.

斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ, 仲間関係, 無藤 隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編), *子ども時代を豊かに：新しい保育心理学*, 1986, 東京：学文社, 59-111.

Takahashi, K., Affective relationships and their lifelong development, In P. B. Baltes. (ed.) *Lifespan development and behavior*, 1990, 10, NJ: LEA, 1-27.

Wellman, H. M., *The child's theory of mind*, 1990, Cambridge, MA: MIT Press, 93-121.

Wimmer, H., & Perner, J., Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception, *Cognition*, 1983, 13, 103-128.

山田洋子, 実験と自然観察, 東 洋・繁多 進・田島信元 (編), *発達心理学ハンドブック*, 1992, 東京：福村出版, 1173-1178.

依田 新・大橋正夫・島田四郎, 学級構造の研究：入学時より3年間の友人関係の調査, *教育心理学研究*, 1954, 2, 1-9.

吉村 斉, *子育てに悩んだ時の心理学*, 2003, 東京：岩崎電子出版, 88.

吉村 斉, 女子学生の専門職就職意欲および学生生活への満足を規定する要因：自己表現と小集団閉鎖性に注目して, *青年心理学研究*, 2004, 16, 1-14.

吉村 育，中学生の適応感を規定する要因としての対人行動とその性差，*心理学研究*，2007，78，290-296．